



考え

第三十八回『キャッチャー・イン・ザ・ライ』と
『アウター・ワールド』再び



弦楽器「ルカ」友人



第三十八回 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』と『アウター・ワールド』再び～GからUへ～

いろいろまとめて送っちゃってごめんね。

『考えるウマシカ～落書き編～』は3回で終わりにする予定だったんだけど、前回書き忘れた分と今回の内容を考えると、4回シリーズにしたほうがわかりやすいから、終戦の日にかこつけて一気に書き切ります。

さて、約20年ぶりに『キャッチャー・イン・ザ・ライ』を読み直したよ。春樹訳が出てから、ずっと読みたいとは思ってた。前読んだときも「怒ってんなぁホールデン君」と思った気がするけど、相変わらず怒ってたねえ、ホールデン君。

まず結論から書けば、人生とはこの怒りと諦めの世界で何をどう表現するかを選択だ。今回はそういう話を書くつもり。まあ、今までずっとそれしか書いてないけどね。

その前に今さら『アウター・ワールド』の魅力について（蛇足だけど）、前は俺がどこに衝撃を受けたか具体的に書けなかったから、ちょっと抽象的だったと思う。Uには昔言った気がするけど、もう一回改めて書くよ。

ただ『アウター～』って、気付いたら2012年にMOMAって美術館にコレクションされてたりすごい称賛されてて、ウマシかな俺ごときがもはや書くまでもないね。

ゲームってのは長いこと、基本的にはクリアする達成感を味わうのが目的だった。

もちろん最近のネットゲームはチャットとかが目的になったりもするみたいだけど、それでもゲームなんだから敵を倒すとか、対戦するとか、クリアするのが当たり前かつ一般的な目的だろう。

でも『アウター～』の喜びはクリア以外に、本当にしたいと思ったアクションがゲーム内で出来たって驚きにある。これは前の『タッチ』と『巨人の星』の違いでも書いたけど、「ゲームを通して何を表現するか」ってテーマになるはずだ。

具体的にどういうことか。

『アウター～』は基本、マリオと同じ横スクロールアクションで、ボタン配置もジャンプと、アクションボタンの二つでほぼ一緒だ。途中で銃を拾うと、それを構えるのもアクションボタンだよ。

普通のゲームなら、アクションボタンを押せば弾が自動的に出てくる。フラワーマリオならファイアボール、ロックマンならビームが出てくる。ゲームだから当然、何の疑問もない。

でも、『アウター～』はアクションボタンを押すと、まず銃を構えるだけだ。そこでボタンを離せば銃を構えた姿勢で固定される。更にアクションボタンを押す長さで、発射、バリア、ため打ち、に変化するシステムだ。

この「銃を構えるだけ」というアクションがすごく気になってた。他のゲームにはまずないアクションだったから。子供が玩具のピストルを構えて「手をあげろ」ってカッコつけるみたいに、「これで本当に敵が怯えて手をあげたら面白いな」って序盤から思ってた。

それがゲームの終盤で、本当にその場面がやってきた。過去プレイしたゲームにそんなリアリティはなかったし、もちろんネタバレになるから説明書にもない展開だ。

例えばマリオがファイアをボンボン投げて、クリボーはただボーっと歩いて火に入るからクリボーだったはずだ、よね？ところが、マリオがファイア構えて脅すと、クリボーが手をあげるゲーム。それが『アウター〜』だった。

もちろん他にも、(Uが好きな)初期メタルギア(MG)のステルスアクションとかリアリティのあるゲームは知ってたけど、まさかマリオと同じ横スクロールのスーパーファミでこういうアクションができるとは思わなかったよ。

更にこの後PS2のMGS2では、敵のタグを集めるために銃口を向けて脅す、ってアクションができるようになることを思えば、『アウター〜』の表現がいかに早かったかが分かるだろう。

さて、ゲームの話はこれぐらいにして。

『キャッチャー〜』って作品は、極論すれば『人間失格』と『それから』と「雨ニモマケズ」あたりを読んでは、そこまで読まなくてもいい作品かなって思う。大体同じ事が書いてあるから。

気になってサリンジャー自身についても初めて調べたけど、戦争体験で変わってしまった人って意味では、他に水木しげるとかティム・オブライエンあたりを読んどけば補完できそう。サリンジャー自身は戦争そのものを書かなかったようだけど。

いや、ここまで矮小な極論を書きすぎるには理由があるんだよ。

いつもの妄想なんだけどさ、終戦の日を言い訳にして、こっから先ちょっと無茶して言いたい年頃だから。先に書くけど、気分を書いたらゴメンね。

世間様のレビューでさ、翻訳本を比較してどっちが良いとか悪いとか批判したり、部分だけ取り上げてどうのこうの分析するのは、「それ何も読んでないのと一緒にだろ」って思ったりするワケさ。そんなクソみたいなレビュー書くくらいならさっき言った他の本とか、特に『KAGEROU』でも読んでの方がマシじゃない？読後は鍋敷きにも使えるそうだし。ここで「♪便利〜」って、岡崎体育の口パクが聴こえてくる勢いだよ。知らなかったらゴメンね。

『キャッチャー〜』も『人間失格』も、またはもっとわかりやすくエレカシ「ガストロンジャー」でもいいけど、「俺は王様が裸だと思うけど、お前どう思う？」って問いに直接答えずに、言い方がどうだとか、王様って誰だとか、言葉とお茶を濁す風潮自体がクソだって書いてある本に対して、なんでわざわざクソを上塗りするのかって。そういうお前のことをクソだって言ってんだよ、ホールデン君はさ。

だったら本当に『KAGEROU』やら『一杯のかけそば』で満足すればいい。「トイ神層」にはそれがお似合いだよ。

って、ますます書きすぎんだけどね。いいんだよ。それで。人間合格。それが人間だモン。これはそういう小説だ。つまり、ひっかけ問題みたいなモンだよ。

みんなクソでファックなんだから。サリンジャーも漱石も太宰も賢治もヒロ斎藤も、例外なく同じクソだよ。バンクシーもMBWも、又吉も紗倉まなも『ガンダム』も『マクロス』も、文学もアニメもゲームもウマシカも、クソとファックと職業と表現に上下も貴賤もない。間違いなく、みんな一緒にクソまみれで生きてるだけだ。

戦争に行きゃ、よりかぶりつきでクソを目の当たりにできるだろう。クソ祭りみたいなモンだから。いかに世界がファックなクソまみれか痛感して、こっち側に戻って来れないかもしれない。

だってこっち側の世界じゃ、基本的にそういうのは「なかったこと」で動いてるから。クソと放射性物質はトイレに流れたら浄化されて天上界に召されるってくらいの温度だから。ファックと紛争と甲状腺ガンと作業員のピンハネなんて都市伝説だからさ。

国や地域はたぶん関係ない。それが人間で、それが世界の在り方なんだろう。

このクソまみれの世界で、自分ちのトイレのクソだけキレイにする無自覚なファック美人を目指す物語か、お前もお前もお前もみんなクソまみれだってホールデン君みたいに喚く物語か、内容は違っても同じ表現であり、結局は同じクソだ。

だからいいんだよ。翻訳文を比較して罵る材料に使おうが、癒しを求めて何かわかったような救いを語ろうが、表現は自由だ。それが平和な幸福ってモンだ。

宮沢賢治は「せかいがぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」って言ったっぽい。「世界平和なんて不可能なんだから、クソまみれなこの世界でお前だけ幸せになるな」って、理想論者の賢治らしいと俺は解釈する。まあ、これも言いすぎだけどね。

この怒りと諦めのクソな世界の中心で、愛を叫ぶのか、ファックって壁に刻むのか、（ブラってツイートするのか）そこが個人の表現の自由であり魅せ所だろうけど、でもどう表現したところで、クソとファックをこの世から消せるワケじゃない。

ただ世界をコントロールするのは個人では不可能だから、それは諦める代わりに、カウンターとしてこの怒りをどう表現して共感を呼ぶか、って個人の選択肢は残されてる。

だから結局、人生ってのは「この怒りと諦めの世界で何をどう表現するかを選択だ」って結論になる。『キャッチャー〜』って作品はそもそも、俺だってUだって『KAGEROU』だって、みんなみんなクソで友達なんだぜ〜って、当たり前を再認識するための「字足らずのパンク」みたいなモンだと俺は思う。裸の王様に従って自分も脱がざるを得ない違和感に、押し潰されそうな人々に向けてのさ。

大半の大人は諦めて脱いじゃってるし、はなから脱ぐ気がないヤツは社会的に殺されてるか、

でなきゃ権力側にちゃっかりおさまってる。『人間失格』もそういう話じゃん、結局。んで、ジャニーズ然り。

ちょうど今の香取クンに『キャッチャー〜』、ぴったりじゃない？ よく知らないけど解散の件で、集金システムとしてのテレビ業界がいかにクソまみれかって、視聴者みんな再認識したワケじゃん。アレで騒いでるマスコミはみんな、何でもいいから金と注目を集められるクソに群がってるハエだって認識は広がってる、よね？

今回もこんな感じ。いや、ちょっとホールデン君の怒りにあてられてる分、いつもより酷いことになってるね。ここまで書いたらさすがにやり過ぎじゃない？ って自分で言う。もう一回謝っとうか。ゴメンね。

でも考えたことなかったけど俺自身、『キャッチャー〜』に強い影響を受けてたんだと思ったね。この「ウマシカ」自体、下手なクソ真似だよ。今気づいた。

さて、Uはどうかかな？



「今回のボツ帯文」

ウマシカを知らなければ、
KAGEROUしか見えないじゃないか。
ウマシカを知らなければ、
どうやって人生を想像するのだ（KAGEROUか？）

人生に、KAGEROUを。

考えるウマシカ～第三十八回 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』と『ア
ウター・ワールド』再び～

<http://p.booklog.jp/book/109067>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109067>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109067>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ